The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ごみの社会学――「モノの価値」と「ごみの家庭生活」の視点から
Author(s)	梅川, 由紀
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76339
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　梅川　由紀　　）	
論文題名	ごみの社会学――「モノの価値」と「ごみの家庭生活」の視点から

論文内容の要旨

本論文の目的は「現代日本の都市部に住む人々にとって、家庭から排出されるごみはどのような存在であるか」を明らかにすることである。第Ⅰ部では、本研究の理論的枠組みを提示した。第1章では、これまでごみは「問題」として論じられてきたが、ごみを日常生活から切り離すことのできない「生活文化」として論じる必要について論じた。第2章では先行研究の整理を行った。その結果「モノの価値」と「ごみの家庭生活」という理論枠組を提示した。

第Ⅱ部では「モノの価値」の切り口から現代社会のごみを検討した。具体的には、いわゆる「ごみ屋敷」を「モノとごみの境界が問われる現場」と理解し事例として用いた。第3章では、ごみ屋敷の現状について論じた。第4章では、ごみ屋敷の当事者Aさんの事例を中心に、当事者が溜め込むモノの意味について検討した。Aさんは望ましい自己を実現した記憶が刻まれた食品を証として溜め込み、アイデンティティを確立する様子を明らかにした。第5章では、Aさんと周囲の人々のやり取りに注目した。なぜAさんは、周囲の人々から「ふつう」とは見なされないのか、という視点を切り口に、モノの価値の議論を精緻化した。その結果モノには「機能的価値」「心情的価値」「可能性的価値（モノに対する／自己に対する）」という三つの価値が存在することを明らかにし、これらを「モノの三つの価値」と名付けた。なかでも現代社会は機能的価値が重視され、ごみ屋敷の当事者のように、特定の事象に関係する全てのモノに対して、あるいは所有する全てのモノに対して心情的価値や可能性的価値を見出すことは「ふつう」とはみなされない様子を明らかにした。

第Ⅲ部では「ごみの家庭生活」の切り口から現代社会のごみを検討した。具体的には、現代社会のごみと人間の関係の基礎を構築した、転換点としての「高度経済成長期（1955～1973年）」に着目し、高度経済成長期に見られる様々な「違和感」に着目し、社会史を描いた。第6章では、高度経済成長期が転換点と理解できる理由を、ごみの量、ごみの質、ごみ収集方法、ライフスタイルの観点から論じた。第7章では、「台所改造」「ごみ収集方法」「プラスチックの登場」という三つの変化が、ごみと人間の関係に与えた影響について考察した。特に人間の感覚やごみ自体の変化に留意しながら検討を行った。そして、日常生活の中に溢れていた腐敗や汚れと共存する「起伏に富む風景」から、一様に清潔さを求める「平面的な風景」へと変化する様子や、不要になった対象に対して、多様な「その後」が想定される「くず」と人々が編み出す「くず文化」が崩壊する様子を示した。このように、日常生活の中に存在した、モノでもごみでもない「マージナルな対象」が「ごみ」として再解釈され、排除される流れを確認した。第8章では、掃除機と電気冷蔵庫の普及と廃棄が、ごみと人間の関係に与えた影響について考察した。掃除機や電気冷蔵庫の導入により、人々は、これまで気に留めていなかった存在をごみとして「発見」し、ごみ概念自体を拡大させている様子を確認した。

以上の考察をもとに、第Ⅳ部の第9章で結論を述べた。現代社会は「マージナルな対象」のカテゴリーが減少し、「モノ」と「ごみ」カテゴリーの二極化が進んでいることを明らかにした。私たちはモノに自己の痕跡を残しながらモノと対峙している。この痕跡は「くず」という「モノの第二の人生」の段階を経ることで「浄化」されていたが、モノとごみの二極化が進み、マージナルな対象の徹底した排除が進む現代社会では、浄化することができないことを論じた。

現代日本の都市部に住む人々にとって、家庭から排出されるごみは、ときに「モノの価値」や「所有者の痕跡」が残る「生きもの」になりうることを明らかにした。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　梅川　由紀　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授	山中　浩司
	副査　教授	牟田　和恵
	副査　教授	白川　千尋

論文審査の結果の要旨

梅川由紀の博士学位申請論文『ごみの社会学――「モノの価値」と「ごみの家庭生活」の視点から』は、ごみと人間との関係について、ごみ屋敷調査を主体とした「モノの価値」という視点から見た「ごみ」と人間の関係、戦後の高度成長期を分水嶺として変貌した「ごみの家庭生活」（家庭におけるごみの位置づけ）という視点からみた「ごみ」と人間の関係という２つの研究から、従来、社会における「問題」という視点でしか扱われてこなかった「ごみ」の「生活文化」という側面に光を当て、「ごみ」から人間生活のあり方について考えるという野心的で哲学的な労作である。近年、欧米の社会学や人類学では、人間の文化や社会を中心とした社会観や歴史観に対して、「モノ」や「人工物」に焦点を当てる研究が増加しており、アクターネットワーク、マテリアルカルチャー、モノの社会生活といったトピックが関心を集めている。申請者の論文は、そうした大きな国際的潮流の中に位置づけられるものの１つと考えられる。著者は、まず、「ごみ」への著者の関心の由来と問題意識について述べた後で（第１章）、「ごみ」と社会秩序をめぐる、メアリ・ダグラス、ケヴィン・ヘザーリントン、マイケル・トンプソンら、人類学、社会学の議論を概観し、さらにアパデュライやコピトフらの物質文化論から、「モノの価値の推移」「モノからごみへの移行」「廃棄の意味」といった問題について理論的な整理を行っている（第２章）。著者によれば、「ごみ」と「モノ」の境界は曖昧で流動的であり、しばしば可逆的でも可変的でもあることから、これを「マージナルな対象」と呼ぶことが適切であるという。「マージナルな対象」は、しばしばその「価値」が受け手によって逆転し、また、秩序を脅かすと同時に秩序を再生するものともなるという。こうした枠組の上で、著者は、ごみ屋敷当事者への聞き取り調査と現場でのフィールドワークから得られたデータを、モノの３つの価値と「ごみ」との関係性という視点で分析している（第３，４，５章）。著者によれば、モノにはモノが果たす機能的な価値、所有者に対してもつ心情的価値、そして所有者の将来に関わる可能性的価値という３つの価値が存在し、それぞれが、モノとごみの境界に深く関わるという。「ごみ屋敷」の当事者は、しばしば大量の機能不全のモノをため込んでいるが、これらは、その所有者にとって特別な心情的な価値を持つ場合もあり、また、しばしば部外者には理解できない、所有者が思い描く自己の将来と密接に関連する価値を有する場合がある。こうした視点は従来のごみ屋敷問題研究ではほとんど扱われたことがなく、申請者の国内外での報告や論文は注目を集めている。また、ごみが「問題化」し、現代的な意味での「ごみ問題」が生じたのは日本では高度経済成長以降であり、この点の文化的な意義を明らかにするために、申請者は高度経済成長以前における「ごみ」のあり方と以後のあり方について、主に家庭における「ごみ」の扱いを中心として、婦人雑誌や清掃局の広報誌などから比較検証を行っている（第７，８章）。申請者は、高度経済成長期を境として、廃棄物は「くず」から「ごみ」へ、また、それが扱われる風景は「起伏にとむ風景」から「平面的な風景」へと変貌したとし、この変化におけるプラスチックごみの登場は重要な意味をもったと主張する。さらに掃除機や冷蔵庫といった家庭内のイノベーションがごみの概念を変貌させていったとする。これらの分析を経て、申請者は現代社会においてマージナルな対象が許容される範囲が過去と比較して格段に狭まっており、われわれの周囲の事物は「モノ」と「ごみ」のカテゴリーの二極化が進展しているとしている。申請者が行ったごみ屋敷当事者へのインタビュー調査、フィールドワーク、高度成長期のごみ収集方法の変化、掃除機や冷蔵庫の登場とごみ概念の変貌の分析、これらは、どれも非常にユニークな研究であり、社会学において新しい領域を開拓していると高く評価し、人間科学博士の学位にふさわしい研究と評価した。